

聖書：使徒 20：28～38

説教題：神の教会の牧会

日時：2014年6月29日

エペソの教会の長老たちに対するパウロの告別説教の続きです。第3次世界伝道旅行でパウロはエペソ伝道を果たし、その後、マケドニヤとアカヤを訪問してエルサレムに戻る途中、ミレトに立ち寄って長老たちを呼びます。もう2度と彼らの顔を見ることはないだろうと予測して教会の牧会についてメッセージを語ったのがこの説教です。今日の28節からエペソの長老たちに対する直接的な勧告の言葉へと入ります。この箇所を三つのポイントで見て行きたいと思います。

その第一は彼らの務めについてです。28節：「あなたがたは自分自身と群れの全体とに気を配りなさい。聖霊は、神がご自身の血をもって買い取られた神の教会を牧させるために、あなたがたを群れの監督にお立てになったのです。」まずパウロは「自分自身と群れの全体とに気を配れ」と言います。この順番が大事です。先に来るのは「自分自身をよく監視せよ」ということです。なぜでしょうか。それは自分自身を治めることのできない人が他の人を治めることなどできないからということです。自分が霊的にいい加減な状態でありながら、他の人を霊的に教え導くことは不可能です。自分自身が信仰においてどのように歩んでいるかという程度に応じて、牧会の働きも変わって来る。1コリント9章27節：「私は自分のからだを打ちたたいて従わせます。それは、私がほかの人に宣べ伝えておきながら、自分自身が失格者になるようなことのないためです。」

そして「群れの全体に」と言われています。自分の好きな人、相性が良い人、自分を慕ってくれる人だけ、ではありません。群れの全体に気を配る。自分が得意でない人にも。なぜそうなのか。それはその群れは神の教会だからです。さらに教会は「神がご自身の血をもって買い取られたもの」と言われています。すなわちイエス・キリストという尊い代償を払って買い取られたものである。その教会を牧させるために、聖霊があなたがたを監督として立てたとされています。私たちの教会は選挙によって教会役員が選ばれます。しかし選ばれた人は、ただ人によって選ばれたのではなく、聖霊が立てた人だと言われています。これは立てられた者にとって大きな励ましです。聖霊が立ててくださったのなら、聖霊がその職務を果たすに必要な力をも備えて下さるでしょう。と同時にこのことは、その人が責任を負うのは聖霊に対してであるということになります。これも私たちがしっかり押さえるべき大切なポイントです。長老は教会の意見をまとめ、教会の意志を実行に移す人ではありません。長老は何よりも自分を立ててくださった聖霊に対して第一の責任を負うのです。ですから役員選挙の時、私たちは自分の意見を聞いてくれそうな人を選ぶという視点で選挙してはならないのです。それでは自分が主になってしまいます。そうではなく、教会のかしらなる主の御心をよく見分けることができる人、そして主の御心に従って教会を導いてくれる信仰の人を祈りの内に見出して票を投じるのです。もう一度心に刻みたいことは、教会はあくまで神の教会であるということ。ここには父、

子、聖霊の三位一体の神が出て来ています。教会はこの三位一体の神に起源を持つ、神ご自身のものです。そのことに恐れおののきつつ、御心が行なわれることを求めて行かなければなりません。

パウロは「気を配りなさい」と言いましたが、特に警告していることが 29～31 節にあります。それはやがて凶暴な狼が入り込んで来て、群れを荒らし回るということです。すなわち異端的な教えを持ち込んで、教会をかき乱す。いや問題は外から入って来るだけではありません。あなたがた自身の中からも、色々な曲がったことを語って、弟子たちを自分の方に引き込もうとする者たちが現れる。ローマ 16 章 17～18 節：「兄弟たち。私はあなたがたに願います。あなたがたの学んだ教えにそむいて、分裂とつまずきを引き起こす人たちに警戒してください。彼らから遠ざかりなさい。そういう人たちは、私たちの主キリストに仕えないで、自分の欲に仕えているのです。」ですから「目をさましていなさい！」とパウロは勧告します。誤った教えが入って来て、人々がかき回されることがないように。また分派運動が起こって分裂に至ることがないように。そのためにはパウロもエペソで夜も昼も、涙と共に一人一人を訓戒し続けたと言っています。このように一人一人に注意を払い、関わるが必要になって来るということでしょう。そのパウロの模範に倣うようにとされています。

第二に見て行くことは、この働きを行なうための力をどこに求めるかということです。32 節：「いま私は、あなたがたを神とその恵みのみことばとにゆだねます。みことばは、あなたがたを育成し、すべての聖なるものとされた人々の中にあつて御国を継がせることができます。」ここに教会を真に導く力は長老たちの内ではなく、神とそのみことばの内にあると言われています。究極的に言えば、神の教会を養い導いてくださるのは神なのです。そして神はご自身の恵みのみことばを用いて、その働きをなさいます。ですから私たちは神に信頼し、また神の恵みの御言葉に信頼して、働きに当たれば良いのです。

この神の恵みの御言葉には何ができるでしょうか。二つのことが述べられています。一つはあなたがたを育成することができる。その人を成長させ、さらなる成熟へ導くことができる。もう一つは、すべての聖なるものとされた人々の中にあつて、ついに御国を継がせることができる。ある人々と関わる中で、あの人を導くことはとても難しいと思うことがあるかもしれません。一体どうやってあの方は変わって行けるのだろうか、もうお手上げである、と。いや自分を振り返ってみても、信仰歴ばかりは長いが、さっぱり成長していない私は本当に最後の救いまでたどり着けるのだろうかと思われる時があるかもしれません。しかし御言葉は、それ自身で望みを持たないようなすべての者を御国を継がせるところまで導くことができる。ですから私たちは心定めて神の御言葉に信頼し、これを宣べ伝えれば良いのです。何か自分の新しい考や世で流行している斬新な方法、あつと驚くようなことを行なえば教会は活気づき、いのちを持つのではないのです。神の教会を真に導く霊的武器は神の恵みの御言葉です。ですからこれを脇に置いて別の武器で戦うような愚かなことをせず、常にこの神の恵みの御言葉が力を発揮して自分と教会を導いてくれるように、これを忠実に語り伝えることに努めて行けば良いのです。

三つ目にパウロはもう一度、自らの模範を彼らに示しています。33～34節：「私は、人の金銀や衣服をむさぼったことはありません。あなたがた自身が知っているとおりに、この両手は、私の必要のためにも、私とともにいる人たちのためにも、働いて来ました。」これまで見て来た使徒の働きの中のパウロの姿から分かること、また彼の手紙から分かることは、パウロは自分が当然用いて良い権利も、福音のためには用いない生き方をしたということのことです。彼は手紙の中で、福音の働き人は福音の働きから報酬を得るのは当然であると、旧約聖書を引用しながら、また主イエスの言葉を引用しながら述べています。しかしもしこのことが人々のつまずきになるなら、あるいは福音にとって何らかのマイナスになるなら、進んでその権利を放棄した。そして誰の世話にもならず、あるいは誰に負担を強いることにならないように自活しました。それどころか彼は他の人たちのためにも働いたと言います。それは主イエスの模範に倣うことだと35節で彼は言っています。35節の「受けるよりも与えるほうが幸いである」という言葉は、そのままの言葉としては福音書に見当たりません。しかしこれはイエス様の生き方そのものをズバリ言い現わした言葉であると言えます。イエス様は人々に仕えてもらうためにではなく、かえって人々に仕えるために来たと言われました。マルコ10章45節。そしてイエス様の十字架のみわざはその生き方の結晶であると言えます。パウロはその主イエスによって救われた者として、その主イエスの生き方に心から感謝し、自らもその姿にならって歩みました。これは私たちにとって非常なチャレンジとなる言葉です。「受けるよりも与えるほうが幸いである」という言葉は聞いている分には美しく、素晴らしい言葉だと思います。しかし実行するのがとても難しい。私たちは人に与えるよりも受けたいと願う人間です。人から何かもらう時に喜びます。しかし真の幸いはその反対側にあるということです。これは私たちがただ主イエス様の姿を見つめることによってのみ導かれることでしょうか。十字架上でご自身のいのちまで与えてくださった主に感謝して、主と同じ道に踏み出す時に、私たちはこの幸いを味わい始めます。それは何よりも主と一つに結ばれるところから来る喜びと言えます。その歩みを通して私たちは主がどんなに私を愛してくださったか、それはどんなに大きな犠牲を伴うことであつたのか、その一端を実感をもって知るように導かれます。またこれは三位一体の神と一つになる喜びとも言えます。パウロはその道に歩いて来ました。このことを万事につけ、自らの歩みを持って彼らに示して来たと言っています。神の教会を導く者は、このように歩まなければならないということでしょうか。「受けるよりも与えるほうが幸い」との原則にまず自らが生きることをもって、他の人をもこの幸いへと導く歩みをなすべきであるということのことです。

こう言い終わって、パウロはひざまずいて皆とともに祈りました。皆は声をあげて泣き、パウロの首を抱いて幾度も口づけしました。彼らはパウロの身をさらけ出しての導きに心から感謝したのです。そしてもう二度と会えないだろうとの言葉によって特に心を痛めます。パウロの説教は強烈なインパクトを人々の心に与えました。それは彼の生き方を通しての説教だったのでした。

私たちはこのパウロの言葉をどのように聞くのでしょうか。これは長老たちに対して語られた御言葉だから、そうでない私には直接当てはまらないと考えるべきでしょうか。そうではあり

ません。ここにはもちろん、すべての神の民に当てはまるメッセージがあります。改めて思わされるのは、教会は神の教会であるということです。私が勝手に私物化して良いところではない。あるいは自分勝手な見方で軽んじたり、見下したりしてはならない。かえって恐れと喜びをもって神の御心が実現するように祈り求めなければならない。聖霊が立てた役員たちに従い、支えなければならない。また神の恵みの御言葉にこそ信頼すべきこと、御言葉こそ第一の霊的武器であること、そして私たち一人一人が「受けるよりも与えるほうが幸い」との主の生き方に倣って歩むべきことを教えられます。と同時に、このパウロの説教はやはり教会の指導者たちが特に心して聞くべき言葉であるというのはその通りでしょう。ここは神の教会です。神がご自身の血をもって買い取ってくださった教会です。その尊い神の教会の牧会にあずかるようにと神は召してくださっています。パウロが常に主イエス様を見つめ、見習って歩んだように、私たちがパウロを見ると共に、何よりも教会のかしらイエス様を見つめて歩みたいと思います。私たち一人一人がイエス様を映し出す小イエスとして歩むことができますように。今日の御言葉の前に余りにも不十分であることを感じる私たちは、そのたびに主のもとに行って赦しと助けを祈り求めなければならないと思います。そして主の恵みによって新しく立たせていただいて、神の教会の成長と祝福のために、主の手足として用いていただく器の幸いと光栄に生かされて行きたいと思います。